

1868 2018

肥前さが
幕末維新博覧会
Hizen Saga Bakumatsu-Meiji
Restoration Expo



メインフラッグ



メイン会場の「幕末維新記念館」(肥前さが幕末維新博覧会HPより転載)

地方創生に必要な不可欠なことは、そこに生まれ住む・働く人たちが自分たちの地域に「誇り」を持つことであると思います。しかし、その想いを醸成していくのは中々難しいことでもあります。特に地元にいると何故か地元の良さがわからない、幼少期は学校でも地域の歴史は印象に残る学習ができていないように感じ、「ここに生まれて良かった」「わが地域はこんなに凄いな」という気持ちを持ち続けることは、情報入手の手段が多様化し、多くの情報が

何を目的として 地域をプロモーションするべきか

では44位(2018年)です。しかしながら、歴史を測れば幕末維新期に国内最先端の科学技術を有し、鎖国から開国へと向かう流れの中で明治維新の「鍵」を握っていたのは間違いなく「佐賀」なのです。幕末明治、佐賀鍋島藩10代藩主の鍋島直正は政治家としても教育者としても素晴らしい、その戦略はぶれることがなく、また、日本の未来を見据え、西洋の新技術の導入を技術者達と追及していく生き様は浸透します。築地(ついで) 反射炉、世界遺産に登録された三重津海軍(国産初の実用蒸気船建造)などはその功績の一部です。そして、大隈重信(2度の総理大臣を務め早稲田大学の創立者)、江藤新平(初代司法卿で国の法律の仕組みを作った)、佐野常民(日本初の海軍を作り日本赤十字社の創業者)、副島種臣(民間初の外務卿)、大木喬任(初代文部卿)、島義勇(北海道開拓の父)らは、直正が拡充した藩校「弘道館」で学んだ同志たちでした。時の藩主、鍋島直正へのロイヤリティは非常に高いもので、直正の不屈のリーダーシップを伺えます。

「佐賀プライド」が 若者に勇気を与える

このイベントは7カ月で150万人を突破、おそらく期間中は200万人に達していることと思われます。もちろん、県外や海外からの来場者も多かったのですが、佐賀県の皆様ご家族で、仲間、カップルで何度も訪れたのではないのでしょうか。そこで改めて佐賀を知り、佐賀プライドに勇気と感動を貰い、自分たちの故郷に胸を躍らせ「志」をもつたに違いありません。地域の良さは自分たちが知り、これからの地域の未来を創っていく若者達につないでいく、そんなムーブメントとなることを切に願っております。

先

地域イベントに見る成功要因とは何か 佐賀県 肥前さが幕末維新博覧会を訪れて

16

地方創生にかかわる中小企業の役割



Human Delight株式会社 代表取締役社長

野田 万起子 のだ まきこ

静岡県出身。東京国際大学経済学部国際学科卒業。米国オレゴン州TIUアメリカ校卒業。1993年株式会社ベンチャー・リンク入社。2010年同社取締役就任。11年同グループのMBOにより独立。インクグローウ株式会社の代表取締役社長を務めたのち、15年より現職。地方自治体の地方創生プロモーションの支援に従事する一方、経済産業省「女性起業家等支援ネットワーク構築事業」の静岡県主宰としても活躍している。

幕末維新期 日本の近未来の鍵となった佐賀

平成30年は、明治維新150年という節目の年、現代を創り現代に生きる私たちは、全てを歴史から学んでいると言っても過言ではありません。幕末維新期に時代の大きなうねりの中で、日本の発展のために既に世界に目を向けていた佐賀。改めて勉強すると、日本で初めての反射炉や実用蒸気船を製造した佐賀は、まさに日本の近代化の先駆けとなりました。現在、明治維新から150年が経った今だからこそ、その先人に学び未来を創り出していく機会として、佐賀では昨年3月から10カ月におよび「肥前さが幕末維新博覧会」を開催してきました。実際に訪れ、これぞ「佐賀プライド」を感じ、またまた地方が世界を牽引していくことが出来るという、勇気と感動をいただいたことを報告したいと思います。

昨年末に東京で佐賀県の山口祥義県知事にお会いする機会がありました。佐賀で開催されている「肥前さが幕末維新博覧会」のお話を伺い、県内はもとより、県外・海外からも実に多くの人がこの会期中に佐賀を訪れていることを知り、早速佐賀行きを決めたのでした。地方創生に係わりそのプロモーションを研究している私にとっては、実に興味深い機会でしたが、実際に参加して大変な感動を受けました。さて、佐賀県と聞いて皆さんはどのようなイメージ・想像をされるでしょうか。私自身は佐賀にゆかりがあり、「唐津くんち」や名産の「有田焼」「佐賀牛」、いちご、自治体では武雄市の画期的な取り組みには大変注目していますが、九州7県では最も知名度が低く、また47都道府県魅力度ランキング